



## CONTENTS

## Top Opinion

1

未来への架け橋

(株)J-BISメンテナンス 代表取締役社長 堀込 順一

## たすきリレー

2

豊臣兄弟！とマラソン

J R東日本コンサルタンツ(株) 清水 満

## 今月の国際データ比較

3

## PF書店／私のインフラ巡礼／編集後記

4

## Top Opinion

## 未来への架け橋

(株)J-BISメンテナンス 代表取締役社長 堀込 順一

株式会社J-BISメンテナンスの堀込と申します。

J-BISメンテナンス……初めて聞いたという方もいらっしゃると思います。昨年5月に建設塗装工業株式会社から社名を変更致しました。弊社はまもなく創業90年を迎えます。鉄道橋りょうの塗装を祖業として誕生しました。設立当時は第二次世界大戦開戦の直前、従事員や物資が不足する中、鉄道省（当時）の鋼橋の維持管理を着実にを行うために、同業の志が結集したのが始まりです。戦後の混乱を抜け、幾多の試練を経ながら現在まで業務を続けて参りました。その間、国鉄（当時）のみならず、民鉄各社や官公庁、地方自治体などの橋りょう塗装にも参画したほか、マンションの大規模修繕や鉄塔等の鉄構塗装にも事業領域を拡げて参りました。



「寿命」にはいくつもの解釈が存在すると考えています。モノの用途が社会的な要求に答えられない状態になった社会的寿命、保有する耐力がそのモノにおよぶ外力を下回るようになる物理的寿命など、様々な尺度があります。

以前担当した社員研修で、携帯電話の取替周期を研修生に聞いたことがありました。その頃はスマートフォンの出回る前で、2～3年で新型に取り替える社員が多かったように記憶しています。中には新機種が出るたびに更新していた猛者もおりました。マイカーの乗り換えも以前は5年程度、最近では7年ぐらいに伸びたようですね。少しずつですが、モノを長く使うという世の中に変わってきたように感じます。

しかし、橋りょうやマンションといった社会資本は容易に更新することができません。社会的寿命の要求はとても長いものであり、先に到来するであろう物理的寿命も可能な限り延伸することが求められて



## 私のインフラ巡礼



## ～目黒架道橋～

60年前に完成した我が国初めてのプレキャストブ  
ロック工法を用いたPC箱桁橋 (鉄建建設 岩井有人)

未来構想PFのホームページ  
(HP)をご覧ください。

会員はもちろん社会に大きく  
開かれた「参加型」HPです。

検索

で検索してください。

トップページへのリンクは

[こちら](#)



います。おそらく、維持費が高み、更新する費用の方が安くなったと判断される経済的寿命の到来まで、供用をつづけていかなければならないでしょう。

私たちが手掛ける事業は、橋りょうやマンションといったインフラの寿命を延ばすお手伝いです。所有者や利用者が安心して使えるように、経年による劣化を補い、あるいは、適切に手を加えることで効用を増すお手伝い、メンテナンスを担っています。

適切にメンテナンスを行うためには、幅広い技術力が求められます。そのインフラがつくられた時代の設計方針や、素材に関する情報、施工時に使われた技術などは必須の事柄です。供用期間中に施されてきたそれぞれの手当の記録からもその時代に適用された技術を読み取る必要があります。私たちがこれから施工するメニューについても、どのような材料を用いるのか、どのような手当を施すか、仕上がりの外観をどのように変化させるのか、といった判断を含め、技術力が求められます。より安価で、施工性が高く耐久性に富んだ材料の開発や、機械化等の省力化といった技術開発もまた、不可欠な事柄です。

社員一同、インフラのメンテナンスの重要性を理解し、今ある資産や公共財を次世代に引き継ぐことに誇りと責任を感じております。日々の仕事に忙殺される傾向は否めないところですが、100周年にむけて社員一同、気を引き締めて頑張ります。

私たちの会社J-BISメンテナンスは  
**Japan/Bridging Times to the future/InfraStructure/Maintenance**  
からとりました。

あたりまえの日々を支える決意を、この社名に込め、未来への架け橋として歩んで参ります。今後ともよろしく願い申し上げます。

## たすきリレー

### 豊臣兄弟！とマラソン

JR東日本コンサルタンツ(株) 清水 満

2026年のNHKの大河ドラマが始まりました。今年は「豊臣兄弟！」とのことで、あまり世の中に知られていない豊臣秀吉の弟、豊臣秀長が主人公ということです。

私は戦国物の小説が好きで若い頃から好んで読んできていたのですが、この豊臣秀長という人物を知ったのは30年ほど前、書店で堺屋太一著の「豊臣秀長」という文庫本を見つけ読んだときでした。この小説は豊臣秀吉という稀代まれなるリーダーを支えた実弟秀長、優れた実務能力を有する名補佐役としての人物を描いたものです。歴史小説ですが堺屋太一著ということでビジネス書的な本でもあります。今回の大河ドラマは原作のない脚本家のオリジナルとのことですが、おそらくこの小説をベースにしたストーリーになるのではと思われます。

この小説のクライマックスは賤ヶ岳の戦いです。この戦いは柴田勝家と豊臣秀吉との戦いで、柴田方の北陸方面軍と美濃・伊勢方面軍に挟撃された豊臣軍が、賤ヶ岳で逆転勝利、織田信長の後継争いに決着をつけるというものです。戦いの推移は、秀長が率いる1万の豊臣勢が、北陸方面から急襲した柴田勢3万と賤ヶ岳付近で激戦、豊臣勢苦戦の中、柴田勢の攻撃陣が伸びきったところへ美濃方面に出張っていた秀吉が1万5千の軍で大垣から駆け付け、柴田勢の先鋒を撃退、逆転勝利するというものです。

賤ヶ岳の戦いというと福島正則や加藤清正などの活躍が「賤ヶ岳の七本槍」と呼ばれ有名ですが、この戦いのポイントは柴田軍を数に劣る秀長軍が苦戦しながらも秀吉軍来援するまで耐えたことであるようです。大垣から賤ヶ岳までは52kmあり、豊臣軍はこれを5時間で駆け付けたうえ3時間ほどの休憩後戦闘に入ったとのことで、これを「美濃の大返し」とも言われているようです。

52kmを5時間で駆け付けるというのはちょっと信じられないスピードです。当時の戦は槍、弓、鉄砲隊が中心で、これらの武器を携えての強行軍は無理でしょうから、当然これらの武器等は馬や荷駄により運搬されたものと思われます。兵士はわらじ履きで何も持たずに駆け抜けたのでしょうか。この時の速さは時速にすると10.4km/h。現在のの



マラソン大会では、青梅マラソンが30kmですから、2時間53分。フルマラソンは42.195kmですから4時間21分で走ることができ、いずれの大会でも制限時間内で余裕を持って完走できる速さです。また賤ヶ岳に到着後3時間の休憩で戦闘に入ったとのことから、当時の兵士の体力は相当なものであったと思います。

今年も青梅マラソンが開催されます。このマラソン大会は1967年から始まり、今年で58回目となります。私は50歳になったのを機にこの大会の30kmの部に毎年欠かさず参加していますが、60歳過ぎてからの記録は毎年落ちるばかりです。何歳まで制限時間（4時間）内で走れるかわかりませんが、走り終わった後の戦闘の代わりにお酒を満喫するため頑張ろうと思います。

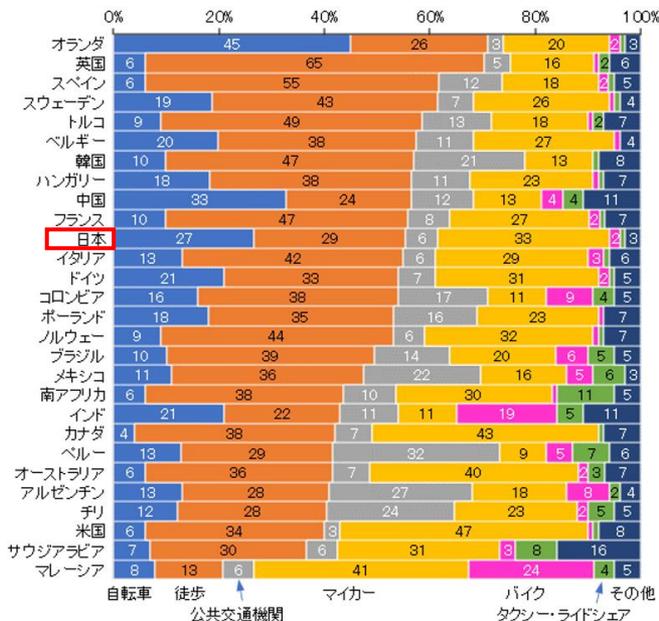


今月の国際比較データ



●主要国における近距離移動の交通手段

パリに本社を構える世界的なマーケティング・リサーチ会社であるイプソス (Ipsos) 社は2022年に世界28カ国、2万人（各国1000又は500人）を対象とした自転車に関するインターネット調査を実施しました。この調査には、2キロ以内程度の自宅近くの移動にもっともよく利用する交通手段は何かを聞いた設問があり、今月はその結果を紹介します。最も自転車・徒歩の多い国はオランダであり、この2つの手段で71%を占めています。オランダに次いでいるのは、英国、スペイン、スウェーデンの順であり、日本は56%で11位となっています。概して、ヨーロッパ先進国で人力依存が高く、米国などの旧英領植民地や途上国で反対に化石燃料依存が高い傾向となっています。2キロ以内程度であれば、自転車・徒歩などで移動するのが健康的にも環境的にも良いことは言わずもがなです。



(出所) Ipsos (2022) ,Cycling Across the World

図 自宅近く2キロ（1マイル）の近距離でもっともよく利用する交通モードは？



PF 書店



本の題名をクリックすると、出版社の書籍紹介HPにリンクします！

### ① 食べすぎる世界

(ヘンリー・ディンブルビー、ジェミマ・ルイス著 英治出版)

現代人は確かに食べ過ぎである。それを論じる『食べすぎる世界』。人間は安価で手軽な超加工食品に依存し、肥満や生活習慣病が拡大する一方、食料生産は環境破壊を招いている。人々の不健康な食欲と企業投資が悪循環を生み、健康被害と環境負荷が深刻化する。食料システム（生産、加工、流通、消費、等の一連のサイクル）は生物多様性損失の原因の約80%、温室効果ガスにおいては約30%を占め、英国では肉・乳製品消費を30%削減する目標も掲げられた。本書は健康、貧困、食品廃棄、添加物、環境問題を体系的に論じ、個人の意識改革だけでなく国家主導の対策の必要性を説く。

### ② 心に折れない刀を持って (森岡 毅 著 ダイアモンド社)

USJ再建を成し遂げた著者が、頓挫した沖縄テーマパーク構想を「ジャングリア沖縄」として実現するまでを描く。資金調達や交渉、挫折と成長の舞台裏を、覚悟と熱量あふれる言葉で綴る。単なる開業記ではなく、ビジネスを通じて社会に何を届けるかという問いが軸だ。日本では高リスクと見られがちなテーマパークだが、世界では成長産業として有望であるという視点も提示。挑戦とは成功か失敗かではなく、悔いを残さない生き方だと示し、旅行者から経営者、メーカーまで示唆を与えてくれる。

### ③ 天下の値段 (門井 慶喜 著 文藝春秋)

個人的に好きな作家・門井慶喜。いつもは偉人の伝記が多いが、今回は米を経済の基盤とした江戸社会を背景に、大坂・堂島の米市場を舞台として展開する物語である。年貢米を扶持として受け取る武士と、米を通貨化し先物取引（帳合米）で活況を呈する商人たち。後に八代将軍となる吉宗は、米市場を幕府の手に取り戻そうと商人側と対峙する。大坂の商人たちは利潤だけでなく、市場の自由と自治を守るため立ち向かう。関西弁の活気ある人物描写とともに、金融の仕組みを平易かつ痛快地に描き出す、読みやすい一冊であった。



私のインフラ巡礼



### 「目黒架道橋」 (東京都港区・品川区)



毎年1月号で紹介している同じ干支に完成したインフラ。2月号での紹介になってしまいましたが、今回は60年前の丙午（1966年）に完成した「目黒架道橋」を紹介します。「目黒架道橋」は東京都港区と品川区の区界に架かる首都高速道路2号目黒線の一部を形成する高架橋です。建設当時から自動車交通及び歩行者が多い地域に建設されたため、施工に関する制約が多く、これを解決するために当時最先端であった数々のPC技術が採用され、我が国初めてのプレキャストブロック工法を用いたPC箱桁橋でありました。当時の最新技術を駆使して建設された橋梁であることを受け、同年には土木学会田中賞（作品部門）を受賞しています。 (鉄建建設(株) 岩井有人)

### 編集後記

鉄道をはじめとするインフラを巡っては近年、安全や品質に対する社会の視線が一段と厳しくなっていることを実感します。そうした中で始まったミラノ・コルティナ五輪は、既存インフラを活かし、分散して開催するという新たな姿を示しています。新設や拡張に頼るのではなく、今ある資産を前提に、その価値を最大限に引き出していく姿勢は、これからのインフラ整備やまちづくりにも通じる重要な示唆ではないでしょうか。 (Y.K)